

大阪府 茨木市

平成6年度発掘調査概報 II

葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書

平成7年3月

茨木市教育委員会



(上) 調査区全景（東から）



(下) 調査区全景（西から）



(上) SP-21(地鏡遺構)土師皿出土状況(北から)



(下) 遺構面直上遺物出土状況(北から)

序 文

茨木市は、大阪府三島平野の中央部に位置しているため、古代から現代に至るまでの文化遺産にめぐまれています。市内には、三島地域における弥生時代の拠点的集落である東奈良遺跡をはじめとして遺跡が数多く存在しています。

特に、近年、本市全域にわたる都市化は、今まで地下に眠っていた文化財の顕在化を招きました。

このため、本市教育委員会では、周知の埋蔵文化財包蔵地以外の地域においても、共同住宅やマンションなどの建造物の建設については、事前に試掘調査を行ない、積極的に遺跡の発見や保護につとめてまいりました。

今回、報告いたします葦分神社東方遺跡も共同住宅建設にともなって、試掘調査を実施したところ、新たにその存在を確認したものです。

本調査により、葦分神社東方遺跡が鎌倉時代を中心とする中世集落であることが判明し、今まで、遺跡の実態が不明だった本市の南部地域にも、新たななる知見を得ることができました。

本書の刊行が、本市周辺の地域史にも新たな1ページを書き加えることになり、広く文化財の保護や活用のために資することになれば幸いと存じます。

あとになりましたが、発掘調査に深いご理解と惜しみないご協力をいただきました関係各位に厚く感謝いたします。

平成7年3月31日

茨木市教育委員会

委員長 村山和一

例　　言

1. 本書は、茨木新和町655-1に所在する葦分神社東方遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設に伴って実施したもので、現地の調査は、平成5年12月20日から平成6年1月20日まで実施、以後、平成7年3月末まで内業遺物整理を実施した。
3. 発掘調査ならびに内業遺物整理は茨木市教育委員会社会教育課、濱野俊一が担当した。
4. 現地調査及び内業遺物整理にあたっては、調査補助員として下記の参加協力を得た。

藤田昌宏	西井貞善	田中良子
小牧勤	林慎吾	桑原紀子
坂本美紀	仁王浩二	大戸井和江
吉田和美	西澤泰枝	西坂泰子
高瀬隆治	多田みちる	高橋公子
坂本美紀	森木芳子	
若林純也	峯松皓代	

5. 本書の作成・編集は、茨木市立文化財資料館、館長 松本恵光・主査 奥井哲秀の指導のもとに、濱野がこれにあたった。本書の作成するにあたっては、出土遺物の実測・各種図面作成・遺構・遺物写真及び全体の編集はすべて濱野があたった。
6. 現地調査及び内業整理にあたっては、下記の方々の種々のご協力、ご教示を賜った。

免山篤（名神高速道路内遺跡調査会理事・茨木市文化財愛護会）
西田善一（茨木市文化財愛護会）
松田敏雄（茨木市文化財愛護会）
森岡秀人（芦屋市教育委員会）
古川久雄（六甲山麓遺跡調査会）
橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）
藤田明弘（花園大学考古学研究室OB）

また、原因者の阪口久美子・幸人氏ならびに茨木市立葦原小学校・脚掛工務店・㈱東海アーナースの方々には、調査期間中を通じてご協力をいただいた。（順不同、敬称略）

7. 本冊に使用した地図は、『茨木市都市計画図-1/2,500』及び『茨木市都市計画図-1/10,000』である。

本文目次

序 文

例 言

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境 1

第2節 歴史的環境 1

　旧石器時代 1

　縄文時代 3

　弥生時代 3

　古墳時代 3

　奈良時代 4

　平安・鎌倉・室町時代～近世時代 4

第Ⅱ章 萃分神社東方遺跡の発掘調査 6

第1節 調査に至る経緯と経過 6

第2節 検出遺構と出土遺物 7

第Ⅲ章 ま と め 18

卷頭カラー図版目次

卷頭図版 I (上) 調査区全景 (東から)

(下) 調査区全景 (西から)

卷頭図版 II (上) S P - 2 1 (地鎮遺構) 土師皿出土状況 (北から)

(下) 遺構面直上遺物出土状況 (北から)

挿 図 目 次

第1図 茨木市位置図

第2図 茨木市遺跡分布図

第3図 萩分神社東方遺跡発掘調査位置図

第4図 萩分神社東方遺跡遺構平面図・土層断面図

第5図 萩分神社東方遺跡出土遺物 (1)

第6図 萩分神社東方遺跡出土遺物 (2)

第7図 萩分神社東方遺跡出土遺物 (3)

図版目次

図版1 調査区全景（東から）

図版2 （上）調査区全景（西から）

同 （下）SD-01及びSP-21（地鎮遺構）検出状況（北から）

図版3 （上）SD-02他 検出状況（北から）

同 （下）SP-21（地鎮遺構）土師皿出土状況（北から）

図版4 （上）作業風景（北から）

同 （下）光善寺（島2丁目）石造品残欠埋め込み状況（東から）

図版5 蕁分神社東方遺跡出土遺物（1）

図版6 蕁分神社東方遺跡出土遺物（2）

図版7 蕁分神社東方遺跡出土遺物（3）

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境（第1図・第2図）

葦分神社東方遺跡の所在する茨木市は、大阪府の北部に位置している。市域は、南北に長く面積は76.51Km²、人口は254,000人で北摂地域の中核都市として発展している。特に大阪の衛星都市としての機能は高く、大阪・京都・神戸を結ぶ日本の大動脈である東海道の一端に位置している。

周辺の市町としては、東を高槻市、南と南西に摂津市と吹田市、西と北西に箕面市と豊能町に隣接し、そして、北は、京都府亀岡市に接している。

茨木市の地理的特徴としては、大きく見て北半部は、山地・丘陵で南半部は平野になっている北半分の山地は丹波高原の南端にあたり、標高300m前後の緩やかな隆起準平原を形成しており、北摂山地と呼ばれている。この北摂山地を形成している主な地層及び岩石は、丹波帯とよばれる古生層に属するチャートや砂岩、泥質岩あるいは、輝緑凝灰岩といった古い時代の岩石構成されている。

北摂山地の裾部にかけては、砂礫や粘土で構成している大阪層群からなる丘陵地帯、低位段丘が発達している。また、西には前期洪積層の隆起地形である標高50~100m前後の千里丘陵がある。南半部の平野は、淀川及び安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川（現在廃川）などの市内を流れる主要河川によって形成された扇状地及び沖積平野が広がり、三島平野を形成している。

葦分神社東方遺跡は上記の標高5~10m前後の沖積平野に立地している。今回の調査地周辺の大半は、既に宅地化がなされているが、茨木市の南部地域は条里地割が遺存しており、地形的な景観を特徴づけている。

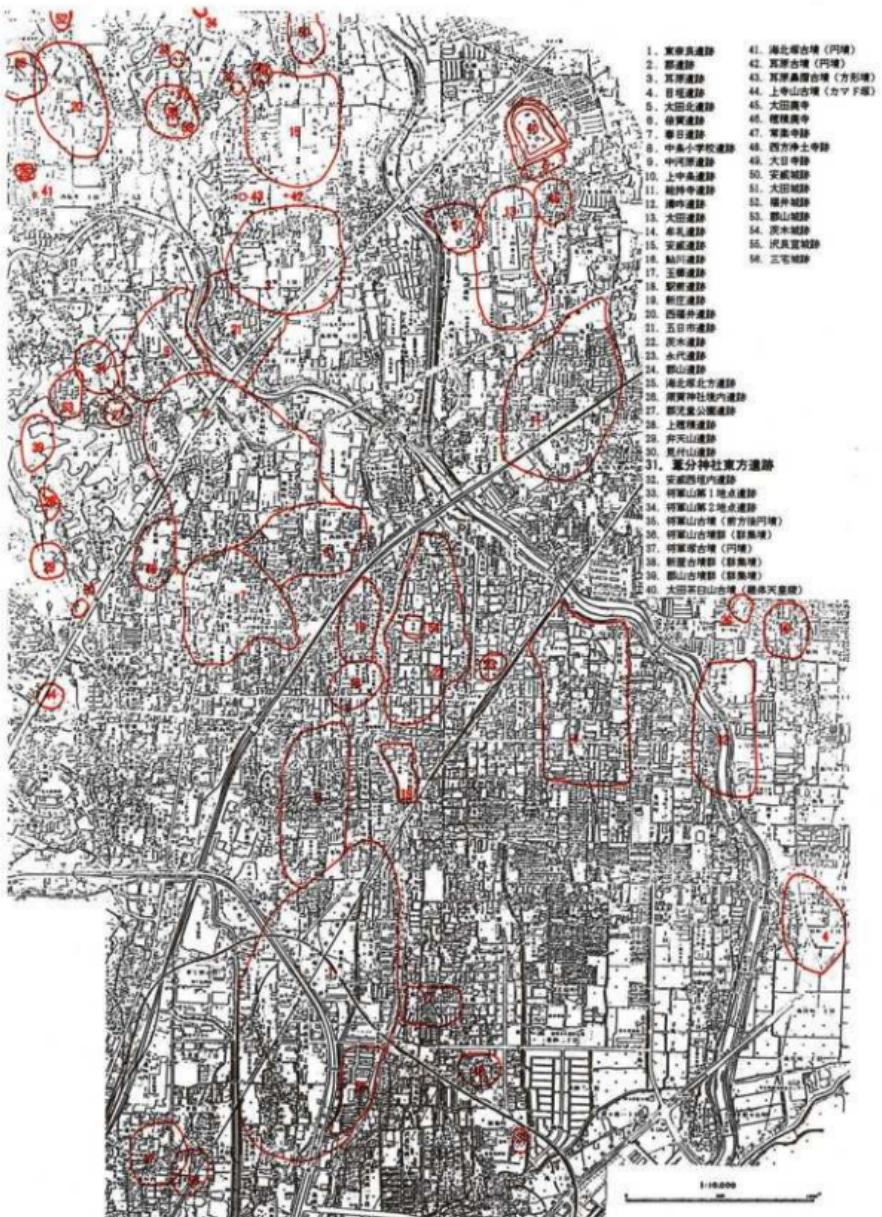
第2節 歴史的環境（第2図）

次に葦分神社東方遺跡周辺の歴史的環境を中心にして見ていくことにするが、当該地周辺の調査事例は少なく、周辺部の開発は中世になってから本格的に行われており、中世以前は茨木市を中心に最近の発掘調査による成果を踏まえながら、時代ごとに概観してみたい。

旧石器時代の遺跡は、内容的には不明な点が多いながらも山麓部の初田遺跡そして丘陵部裾の大田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層から、ナイフ形石器・有舌尖頭器が単独又は数点発見されている。また、近年、東奈良遺跡においてもナイフ形石器が数点発見されている。



第1図 茨木市位置図



第2図 茨木市遺跡分布図

周辺地域では、高槻市の郡家今城遺跡において礫群や石器群が検出されている。他に塚原遺跡・津之江南遺跡・郡家川西遺跡などからも、ナイフ形石器や有舌尖頭器が検出されており、安威川東岸を中心に旧石器時代の遺跡が検出されている。

縄文時代の遺跡は、代表的な遺跡として耳原遺跡がある。縄文時代後期から晩期にかけての遺構や遺物が検出されている。特に、晩期の滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの堀（深鉢）棺墓が16基が検出されている。また、安威川右岸の牟礼遺跡では、自然流路及び井堰・水田が検出され自然流路から若干の晩期（滋賀里Ⅲ式～IV式・船橋式もしくは長原式）の縄文土器が出土している。他に山麓部の初田遺跡や西福井遺跡・太田遺跡でも縄文土器が出土しており、東奈良遺跡においても、前期末（大歳山式）爪形文（C字）土器や晩期後半（大洞AないしA'式）の浮線文土器そして石棒が出土していたが、近年の発掘調査で晩期後半の船橋式と長原式の深鉢片が出土している。また、郡遺跡において石刀が出土しており、今後、縄文土器が出土する可能性が高いと思われる。

弥生時代の遺跡は、前期の東奈良遺跡・日垣遺跡がある。また、前期末には、耳原遺跡・郡遺跡にも集落を形成する。

特に東奈良遺跡は、高槻市安満遺跡と同じく、北摂地域における拠点的集落であり、中期後半には、銅鐸鋳型等の発見により、青銅器生産をしていたことが判明している。

中期及び後期になると市内の主要河川の両側及び丘陵部や山間部にまた新たに集落を形成するため遺跡数が急激に増加する。また、東奈良遺跡や郡遺跡などの拠点集落では、集落規模が大きくなり、近くに分村する遺跡も現れる。

新たに集落を形成する遺跡としては、見付山遺跡・春日遺跡・太田遺跡・講寺遺跡や高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがあり、東奈良遺跡の分村として成立したものと思われるには、中条小学校遺跡そして郡遺跡の分村としては、中河原遺跡・倍賀遺跡などがある。

古墳時代の遺跡としては、北部の山麓部と千里丘陵の裾部に多くの古墳が築造される。前期古墳としては、紫金山古墳、そして將軍山古墳が相次いで築造される。両古墳とも全長約100m程の前方後円墳で、後円部中央には、竪穴式石室がある。後円部の竪穴式石室には断面U字形の粘土棺床をそなえ割竹形木棺があったと推定されている。特に、紫金山古墳の竪穴式石室からは、12面の鏡の他、貝製の鏡形石・車輪石・筒形銅器等の多種多様な副葬品が出土している。統いて前期末には、直径約10mの円墳である安威0号墳及び全長約45m程の前方後円墳の安威1号墳が築造される。両古墳とも、割竹形木棺をいたした粘土櫛が2基検出されている。

中期にはいると、全長226m・後円部径138mの前方後円墳である、太田茶臼山古墳（雑体天皇陵）が築造される。また、最近の発掘調査の結果、太田茶臼山古墳（雑体天皇陵）に先行して築造されたことが判明した太田石山古墳がある。

後期にはいると、市内では最も早く横穴式石室が導入した青松塚古墳を始めとして南塚古墳そして海北塚古墳が築造される。そして山麓部を中心に横穴式石室を主体とする、新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ瀬古墳群などの群集墳が出現する。また、大形単独墳である耳原

古墳やカマド塚である上守山古墳そして後期末から終末期にかけての初田古墳・阿武山古墳が築造される。

最近では、平地部の駅前遺跡・郡遺跡そして段丘上に立地する總持寺遺跡などで、墳丘を削平された埋没痕が多数見つかっており、主体部は、横穴式石室の痕跡が認められないため木棺直葬と考えられている。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から引き続いて存続する郡遺跡・倍賀遺跡・宿久庄遺跡・中条小学校遺跡などがある。特に東奈良遺跡では、前期初頭にかけて再び集落規模が大きくなり、幅7~10mの大溝が掘られたり、多くの他地域の搬入土器が出土している。また、新たに成立した集落遺跡としては、上中条遺跡などがある。

奈良時代の遺跡としては、茨木市を含め北摂地域は律令時代にはいると、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の3郡に分れ、茨木市域は嶋下部に属するようになる。嶋下部は、新屋・宿人(久)・安威・穗積の4郷からなり、嶋下郡衙は、旧山陽道(西国街道)沿いの郡あるいは郡山周辺地域にあったと推定されている。最近の発掘調査では、奈良~平安時代にかけての掘立柱建物跡などが検出されている。このため、今後、郡遺跡周辺の嶋下郡衙が発見される可能性が高いと思われる。

また、この地域を統率していた有力氏族の寺院としては、飛鳥時代末期から奈良時代にかけて創建された太山廃寺・穗積廃寺がある。特に太山廃寺からは、塔婆心礎及び舍利容器一具、そして複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。その他に安威の大縁冠山から単独で凝灰岩製の石櫃から三彩釉有蓋壺の蔵骨器が発見されており、平安前期にはいると、忍頂寺と總持寺が相次いで建立される。

平安時代から中世の遺跡としては、北摂地域は、古くから藤原氏の勢力の強い土地で、平安時代には、茨木市域の多くは、摂関家の藤原氏の荘園であったことが文献から知られている。しかし、中世になると藤原氏の勢力が衰え、変わって荘園領主の氏神・氏寺であった春日大社や興福寺に移り、両寺社に荘園支配は、室町時代15世紀半ばまで続いている。上記の茨木市域の荘園の様子を示す遺構が最近の発掘調査によって検出されている。

葦分神社東方遺跡に近接する玉櫛遺跡において、平安時代後半から室町時代前半(14世紀)にかけての掘立柱建物跡や水田などが検出されている。また、玉櫛遺跡と同じく茨木川左岸に立地する新庄遺跡においても平安時代(9~12世紀)の河川や掘立柱建物跡や小型滑石製地鎮具が検出されている。新庄遺跡で出土している特徴的な遺物としては、綠釉陶器や越州窯系青磁が出土があり、特に、越州窯系青磁は一般集落跡からあまり出土せず、国府・郡衙・寺院などの公的施設跡が平安京などの都城ぐらいから出土するのが通例で、茨木市域では郡遺跡ついで2例目となっている。

また、宿久庄遺跡においては、9世紀後半から10世紀頃にかけての堀立柱建物跡と13世紀後半から末葉にかけての2時期にわたる堀立柱建物跡が検出されている。

そのほかには、郡遺跡・溝呬遺跡・東奈良遺跡においても平安時代から中世にかけての堀立柱建物跡や井戸などが検出されているが、点的調査のため集落構造が判明するまでは至っていない。

上記の莊園などの集落遺跡以外には、茨木市の北部の山間部には、クレス中山中世墓地や伏原中世墓地が点在しており、忍頂寺や八幡神社の五輪塔や佐保の岩風呂などの中世石造品がある。

また、中世全般を通じて、山間部には泉原城や佐保城などの山城、平地部には、太田城や福井城が築造されている。

そして中世末から近世初頭にかけては、茨木川左岸に茨木城が築造され、特に、茨木城主、中山清秀・片桐且元は有名で戦国時代、茨木城の北に位置する芥川城・高槻城そして西の池田城・有岡城（伊丹城）などと、ともに北摂地域において重要な拠点的な城として歴史上重要な城として存在する。しかしながら、元和元年（1616年）の一国一城令により廃城になって以後は、現在まで本格的な発掘調査が実施されていないため、茨木城の正確な縄張りについても確実に判明しておらず、現在も幻の城となっており、今後の発掘調査の成果に期待するところとなっている。

第2章 葦分神社東方遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

- 所在地、大阪府茨木市新和町 655-1
- 調査面積、約168m²（幅約6m×長さ約28mのトレンチ調査）
- 調査原因、共同住宅建設
- 葦分神社東方遺跡の既往の調査（第2図・第3図）

葦分神社東方遺跡は、平成5年11月に共同住宅建設に伴う試掘調査によって新たに発見された遺跡である。近年まで、今回の調査地点である周辺において遺跡は見つかっておらず、茨木市内においても長らく遺跡の空白地帯となっているところである。

しかしながら、最近の発掘調査によって遺跡の空白地帯である茨木市南部地域において、相次いで中世を中心とする集落遺跡が発見されている。

今まで、西方浄土寺跡以外、遺跡らしい遺跡がなかった茨木川左岸において、平成3年から平成4年にかけて大阪府教育委員会が調査した玉櫛遺跡がある。

玉櫛遺跡からは、平安時代後期から室町時代の14世紀にかけての掘立柱建物跡や水田などが検出されており、中世集落の一端が検出されている。

また、今回の調査地点の至近地である島2丁目に所在する光善寺の石垣には、鎌倉時代後期後半から室町時代前半にかけての石造品（五輪塔の地輪部や火輪部）の残欠が埋め込まれて残つており、葦分神社を中心に、島から新和町にかけての一帯に中世集落が存在するものと思われる。

5. 調査に至る経過（第3図）

茨木市新和町に所在する坂口久美子・幸人氏の敷地内において、共同住宅建設が計画された。当該地は前述の通り、從来まで周知の埋蔵文化財包蔵地に入ってなく、敷地面積が500m²を越えるため開発指導要綱にもとづき、埋蔵文化財確認の試掘調査を平成5年11月15日に実施した。試掘調査は、敷地内の中央部東側（NO、1T、P）と西側（NO、2T・P）の2ヶ所に試掘坑を設定した。敷地の現状は水田である。試掘調査の結果、東側の試掘坑から中世の遺物包含層そして西側の試掘坑からは鎌倉時代後半の遺物を中心とする落ち込みを確認した。（後に、本調査においてSD-01の続きと判明した。）この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成5年12月20日より本格的な発掘調査を実施し、平成6年1月20日に現地調査を終了した。

その後、平成6年1月25日に、茨木市立葦原小学校の4年生から6年生の生徒を対象に現地説明会を実施し、平成6年4月7日には、茨木市文化財愛護会4月役員会において発掘調査の概要報告をおこなった。



第3図 荘分神社東方遺跡発掘調査位置図

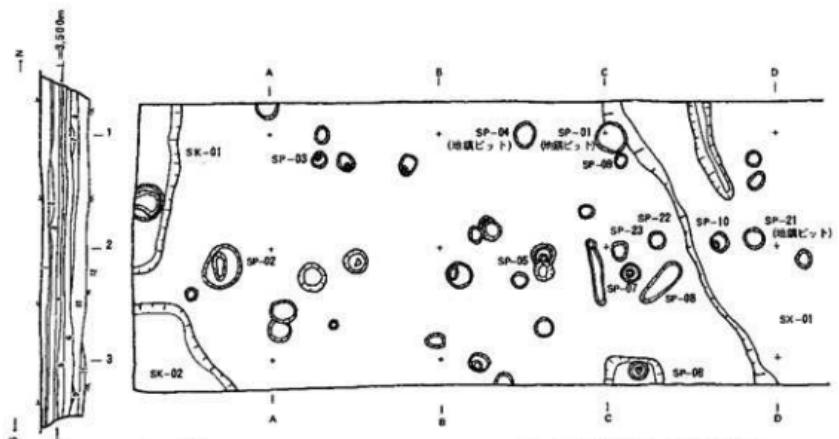
6. 調査の方法

調査にあたっては協議の結果、新発見の遺跡及び中世を中心とする集落遺跡という性格により共同住宅建設予定地の中央部に幅約6m×長さ約13mの面的に遺構が検出できるやや幅広いトレーナーを設定した。調査は、耕土・床土層を重機によって掘り下げ、排土は場内処理をおこなった。そして、重機掘削後は、人力による掘削及び精査を実施した。また、調査にあたっては、調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査をおこなった。

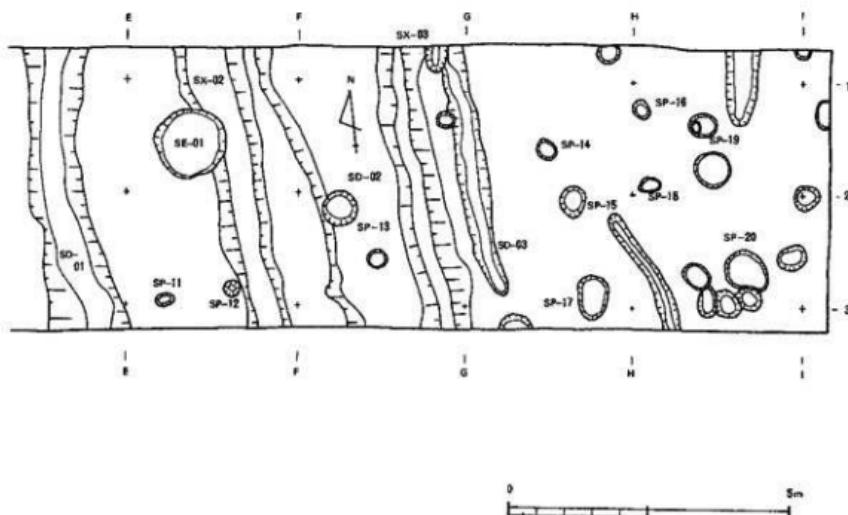
第2節 検出遺構と出土遺物

1. 基本層序（第4図）

調査区の西壁において不遇的にみられる下記の9層を基本層序とした。以下各層について概説する。ただし、西壁においては比較的安定した、堆積状況を示すが、東にいくにしたがって



1. 耕土
 2. 床土
 3. 灰褐色粘質土（中世～近世遺物包含層）
 4. 灰茶褐色粘質土（中世遺物包含層）
 5. 暗灰褐色粘質土（中世遺物包含層）
 6. 灰褐色砂質土（中世遺物包含層）
 7. 灰色砂質土（鰐溝埋土）
 8. 茶灰色砂質土（中世遺物包含層）
 9. 灰色粘質土（鰐溝埋土）
 10. 暗褐色砂質土（中世遺物包含層）
 11. 淡灰色砂質土（SK-02埋土）
 12. 黄色細砂（地山層）



第4図 葦分神社東方遺跡構造平面図・土層断面図

各層からの切り込む遺構の多さのため複雑な上層堆積状況を示し、東側においては、やや堆積状況が異なる。

- 第1層 耕土
- 第2層 床土
- 第3層 灰褐色粘質土（中世～近世遺物包含層）
- 第4層 灰茶褐色粘質土（中世遺物包含層）
- 第5層 暗灰褐色粘質土（中世遺物包含層）
- 第6層 灰褐色砂質土（中世遺物包含層）
- 第7層 茶灰色砂質土（中世遺物包含層）
- 第8層 暗褐色砂質土（中世遺物包含層）
- 第9層 黄色細砂（地山層）

2. 遺構と遺物（第4図～第7図）

今回の調査の結果、2時期の遺構面を検出した。第1遺構面は、第7層の茶灰色砂質土と第8層の暗褐色砂質土上面にて、近世の井戸1基と中世後半から近世初頭の水田耕作に伴う鋤溝を検出した。第2遺構面は、最終面の第9層の黄色細砂（地山層）において中世の溝6条、落ち込み2ヶ所（SX-01, 03）、土手状遺構（SX-02）、土壙2基、柱穴多数を検出した。

しかしながら、調査後の断面観察では、数面の遺構面を確認しており、本来なら4～5時期の遺構面が存在していたものと思われる。以下、第2遺構面の主要な遺構について検出状況と出土遺物について概説する。

検出遺構（第2遺構面・第4図）

SD-01

調査区の中央部において検出した南北溝である。溝幅は平均1.4m、深さ約40cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物は、13世紀後半の和泉型瓦器壇や皿を中心に楠葉型瓦器壇、土師皿、白磁碗、東播系須恵器の捏鉢、そして金属類の鋳造に使用したと思われるルツボや砥石などが出土している。（第5図、1～24）

SD-02

調査区の中央よりやや東側において検出した南北溝である。溝幅は平均2m、深さ約50cmを測る。埋土はSD-01と同じく暗灰色砂質土である。出土遺物は、13世紀後半の和泉型瓦器壇を中心に土師皿、土師質壠、上管状の土師質土器などが出土している。（第5図、25～31）

SD-03

調査区の東側において検出した南北溝で、途中でとぎれている。溝幅は平均50cm、深さ約30cmを測る。埋土はSD-01と同じく暗灰色砂質土である。出土遺物は、13世紀後半の和泉型瓦器壇を中心に土師皿などが出土している。（第6図、72～74）

SK-01

調査区の北西端において検出した長方形の土壌で、西壁断面まで伸びておらず、南北溝の可能性もある。検出幅は平均1m、深さ約17cm前後を測る。埋土はSD-01と同じく暗灰色砂質土である。出土遺物は、13世紀後半の和泉型瓦器塊が出土している。（第6図、75～76）

SK-02

調査区の北西端において検出した楕円形の土壌である。検出幅は平均1.5m、深さ約24cmを前後を測る。埋土はSD-01と同じく暗灰色砂質土である。出土遺物は、瓦器塊及び土師皿の破片が少量出土している。

SE-01

調査区の中央部で検出した近世の井戸である。第1造構面において検出した。素堀りの井戸で直径約1.2m、深さ約1m前後を測る。遺物は出土しなかった。

SX-01（落ち込み）

調査区の西部で検出した第9層の黄色細砂（地山層）を削った中世の段差である。埋土は淡灰色粘質土である。この埋土下層において和泉型瓦器塊、土師皿、白磁碗、東播系須恵器の捏鉢、土師質壺、など比較的時期幅のある遺物が出土している。（第6図、61～71）

SX-02（土手状遺構）

調査区の中央部で検出した土手状遺構である。一部、近世の井戸であるSE-01によって切られている。土手を構成している土は、淡灰黒色砂質土である。土手状遺構内からは遺物は出土しなかった。

SX-03（落ち込み）

調査区の東部で検出した第9層の黄色細砂（地山層）を削った中世の段差である。埋土は暗褐色粘質土である。埋土及び地山層直上で瓦器塊、土師皿などが出土している。

SP-01（地鎮遺構）

調査区の西部で検出したピットである。直径は約60cm前後、深さは、54cmを測り、埋土は灰色砂質土である。ピットから完形の土師皿のみが5枚かたまって出土している。

（第6図、32～36）

SP-04（地鎮遺構）

調査区の西部で検出したピットである。直径は約60cm前後、深さは、21cmを測り、埋土は灰色砂質土である。ピット内からは、SP-01と同じく土師皿が7枚まとめて出土しているが、出土遺物の時期幅と種類が多く、「て」の字状口縁の土師皿や白磁碗・楠葉型瓦器塊などが出土しており、深さもSP-01より浅いため通常の柱穴の可能性もある。

（第6図、37～45）

SP-21（地鎮遺構）

調査区の中央部で検出したピットである。直径は約40cm前後、深さは、20cmを測り、埋土は灰色砂質土である。ピット内からは、SP-01と同じく土師皿が9枚まとめて出土している。出土した9枚の土師皿の直径、器高、製作技法、胎土などがほぼ共通しているので、一括

埋納された可能性が高いと思われる。（第6図、46～54）
その他の柱穴

調査区の全域で多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物として完全に建つものは一棟もなかつた。しかしながら、柱根を残す柱穴や調査外に等間隔で延びる柱穴があるため、間違いなく数棟の掘立柱建物が存続していたものと思われる。また、多くの柱穴からの出土遺物は、瓦器や土師皿の細片で時期決定が難しいが、SP-05の土師皿やSP-06の和泉型瓦器壺・東播系須恵器の裏が図化できるほどの遺物が出土している柱穴があるため複数時期の建物と考えられる。特に、SP-09の須恵器の碗や「て」の字状口縁の土師皿などを出土しているSP-19から11世紀頃まで遡りそうな建物が存在する可能性が高く、葦分神社東方遺跡の成立時期を考える柱穴もあることも指摘しておきたい。（第6図、55～60）

出土遺物（第5図～第7図）

出土遺物は、SD-01及びSD-02を中心とし、溝からまとめて土器が出土しており、他に地鎮遺構から出土した土師皿などがある。出土した土器の多くが、若干の白磁碗などの輸入陶磁器や神出・魚住窯産の捏鉢・甕などの中世須恵器をのぞいて、ほとんどが瓦器壺と土師皿で、一部、土師質の壺・羽釜類で占められている。しかし、残念ながら整理作業に時間的な制約を受けたため、測定を果せた資料は、SD-01・SD-02及び地鎮遺構から出土した土師皿が中心で、その他の遺構や包含層からの出土遺物については、主要な遺物のみしか取り上げていない。しかしながら、出土遺物の時期・種類・傾向についてある程度、把握できるよう努めた。

SD-01出土の遺物（第5図-1～24）

(1)～(8)は、和泉型瓦器壺である。平均口径16cm、平均器高5cm前後を測る。内面に、渦巻き状ヘラミガキと見込み部に平行線ヘラミガキを施すものが多い。外面は一部、ヘラミガキを施す物もあるが、多くが顕著な指頭圧痕を残す。

(9)～(14)は、土師皿である。平均口径は10cm、平均器高1.8cm前後を測る物が多く、口縁部付近を二段に弱いヨコナデをする。やや「へソ皿」傾向の皿や底部に顕著な指頭圧痕が認められる土師皿も出土している。

(15)は、ルツボである。全体的に大きく歪んでいるが平均口径11cm・器高3.2cm前後を測る。内面には、溶解した金属の残滓が3～4mm前後付着している。

(16)は、和泉型瓦器皿である。口径9cm、器高2cmを測る。内面及び見込み部に渦巻き状ヘラミガキを施す。

(17)は、楠葉型瓦器壺である。口径14cm、平均器高5cm前後を測る。内面と見込み部に、細かい渦巻き状ヘラミガキを密に施す。また、口縁部内面には一本の沈線と外面の一部にヘラミガキを施す。

(18)～(21)は、白磁碗である。(18)～(20)は玉縁状の口縁部を呈する。横田・森田氏の分類による白磁IV類である。口径16cm、器高6.5cm前後を測り、削りだし高台で、内面下位に一本

の圓線が巡る。

(22)は、砾石である。荒砥用と思われ、半分欠損している。材質は砂岩系で2面使用痕が認められる。

(23)～(24)は、東播系須恵器の捏鉢である。口縁部端部をやや拡張し面を持ち、口縁部の一部に注ぎ口を持つ。体部は外外面ともロクロナデを施す。

SD-O 2 出土の遺物（第5図-25～31）

(25)～(26)は、土師器の大皿と中皿である。大皿は、口径12.5cm前後を測る。両方とも口縁部付近を二段に弱いヨコナデをする。

(27)～(29)は、和泉型瓦器碗である。平均口径16cm、器高5cm前後を測る。外外面一帯、ヘラミガキを施し、指頭圧痕を顯著に残す。また、内面に、渦巻き状ヘラミガキと見込み部に平行線ヘラミガキを施す。

(30)は、土管状の土師器である。口径9.8cm前後を測り、円筒形を呈す。外表面をナデと刷毛目調整、内面は、細かい刷毛目調整を施す。

(31)は、土師器の壺である。口径35.6cmを測るもので、「く」の字に曲がる口縁部と内面全面にほどこされた粗い刷毛目調整を施す。

SP-O 1 出土の遺物（第6図-32～36）

(32)～(36)は、土師皿である。平均口径9.5cm、平均器高1.8cm前後を測るものが多く、口縁部付近を二段に弱いヨコナデを施す。全体的に底部中央が凹み、若干の「ヘソ皿」傾向を示す。

SP-O 4 出土の遺物（第6図-37～45）

(37)～(43)は、土師皿である。口径8cmから10cm前後の測る土師皿が出土している。特に、(43)は、「て」の字状口縁を呈し、他の土師皿と較べて時期の遅る土師皿である。

(44)は、楠葉型瓦器碗である。口径14.7cm、残存高4.5cmを測る。内面に細かい渦巻き状ヘラミガキを施す。また、口縁部内面には一本の沈線を施す。

(45)は、白磁碗である。口径18.5cm前後を測り、口縁部は玉縁状を呈する。横田・森田氏の分類による白磁IV類である。

SP-P 2 1 出土の遺物（第6図-46～54）

(46)～(54)は、土師皿である。平均口径10cm前後、平均器高1.8cm前後を測るものが多く、口縁部付近を二段に弱いヨコナデを施す。全体的に底部中央部が凹み、若干の「ヘソ皿」傾向を示し、同一時期・同一手法で作られたものと思われる。

SP-O 5 出土の遺物（第6図-55）

(55)は、土師皿である。口径10.4cm、器高2.4cmを測る。口縁部付近はヨコナデを施す。

SP-O 6 出土の遺物（第6図-56～57）

(56)は、和泉型瓦器碗である。口径15.6cmを測る。外表面は顯著な指頭圧痕が認められ、内面は、粗いヘラミガキを施す。

(57)は、東播系須恵器の壺である。口径21.4cmを測る。体部外表面は粗い斜め方向の叩き目調整、内面はナデ調整を施す。

SP-09出土の遺物（第6図-58）

(58)は、須恵質の小型碗である。口径21.4cm・器高3.1cmを測り、内外面ともロクロナデを施す。口縁端部は丸く收める。

SP-18出土の遺物（第6図-59）

(59)は、和泉型瓦器塊である。口径16.2cmを測る。外面下半に指頭圧痕が認められ、内面は、粗いヘラミガキを施す。

SP-19出土の遺物（第6図-60）

(60)は、土師皿である。やや退化した「て」の字状口縁を呈し、典型的な「て」の字状口縁と較べて器高が高く、口縁部の折曲げが鈍い。口径8.5cm、器高1.5cmを測る。

SX-01出土の遺物（第6図-61~71）

(61)～(65)は、土師皿である。全体的に平均口径10cm前後の土師皿が多く、平均器高も1.5cmを測る。特徴的な土師皿として(64)は底部に顕著な指頭圧痕が認められる。また、(65)は口縁部外面に一本の沈線を施す。

(66)～(67)は、白磁碗である。口径17cm前後を測り、口縁部は玉縁状を呈する。横田・森田氏の分類による白磁IV類の碗である。

(68)～(69)は、瓦器塊である。(68)は、口径14.6cmを測り、やや深めの器形の外面に細かいヘラミガキを施す。内面は、一部摩滅のためヘラミガキがわかりにくいが、外面と同様に細かいヘラミガキを施す。黒色土器B類あるいは古いタイプの瓦器塊の可能性が高い。

(69)は典型的な和泉型瓦器塊で、口径14.4cm、器高5cmを測る。外面下半に指頭圧痕が認められ、内面は、粗いヘラミガキを施す。

(70)は、東播系須恵器の捏鉢である。口径36cmを測り、口縁部端部をやや拡張し面を持つ体部は内外面ともロクロナデを施す。

(71)は、土師器の堀である。口径14.6cmを測り、「く」の字に曲がる口縁部と外面に施された縱方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は、外面よりやや細かい刷毛目調整を全体に施す。

SD-03出土の遺物（第6図-72~74）

(72)は、土師皿である。口径9.6cm、器高1.7cmを測る。口縁部付近を二段に弱いヨコナデを施し、全体的に底部中央部が若干凹む。

(73)～(74)は、和泉型瓦器塊である。口径15cmを測る。外面は顕著な指頭圧痕が認められ、内面は、粗い渦巻き状のヘラミガキを施す。(74)は、内面見込み部に平行線のヘラミガキを施す。

SK-01出土の遺物（第6図-75~76）

(75)～(76)は、和泉型瓦器塊である。口径16cm前後を測る。内外面とも横方向の細かいヘラミガキを施す。

第2遺構面直上の遺物（第7図-77~83）

(77)は、土師皿である。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部外面をヨコナデを施し底部はやや凹む。

(78)は、瓦器皿である。口径8.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部外面をヨコナデ、底部付近には顕著な指頭圧痕が残る。内面は、粗いヘラミガキを施す。

(79)～(81)は、和泉型瓦器塊である。口径14.5cm、器高4.5cm前後を測る。外面には、顕著な指頭圧痕が残り、内面は、粗い渦巻き状ヘラミガキを施す。また、内面見込み部に平行線のヘラミガキを施す。

(82)～(83)は、白磁碗の底部である。(82)は、削り出し高台で、内面下半部に一本の圓線が巡る。外面は体部下半及び高台は露胎となっている。(83)は、削り出し高台で、外面は体部下半及び高台は露胎となっている。

包含層出土の遺物（第7図-84～104）

(84)～(89)は、土師皿である。口径9～11cm前後、器高1.8cm～11cm前後を測る物が多く、口縁部付近を二段に弱いヨコナデを施す。全体的に底部中央部が凹み、若干の「ヘソ皿」傾向を示す。

(90)は、青白磁の皿である。口径11cm、器高2.4cmを測る。内面下半分に一本の圓線がめぐり、内外面ロクロ成形後施釉する。ただし、高台付近は露胎である。

(91)は、白磁碗の底部である。削り出し高台で、外面は体部下半及び高台は露胎となって

(92)は、白磁碗である。口径16.8cmを測り、口縁部端は短く外反し、内外面ロクロ成形後施釉する。

(93)は、白磁碗あるいは白磁皿である。口径22cmを測る。口縁部端は丸くおさめ、内外面ロクロ成形後施釉する。

(94)は、小型の砥石である。仕上げ用と思われ一部のみ欠損している。材質は砂岩系で4面使用痕が認められる。

(95)～(100)は、和泉型瓦器塊である。口径16cm、器高4.5cm前後を測る。外面には、顕著な指頭圧痕が残り、内面は、粗い渦巻き状ヘラミガキを施す。また、内面は、粗い渦巻き状ヘラミガキを施す。また、内面見込み部に平行線のヘラミガキを施す。

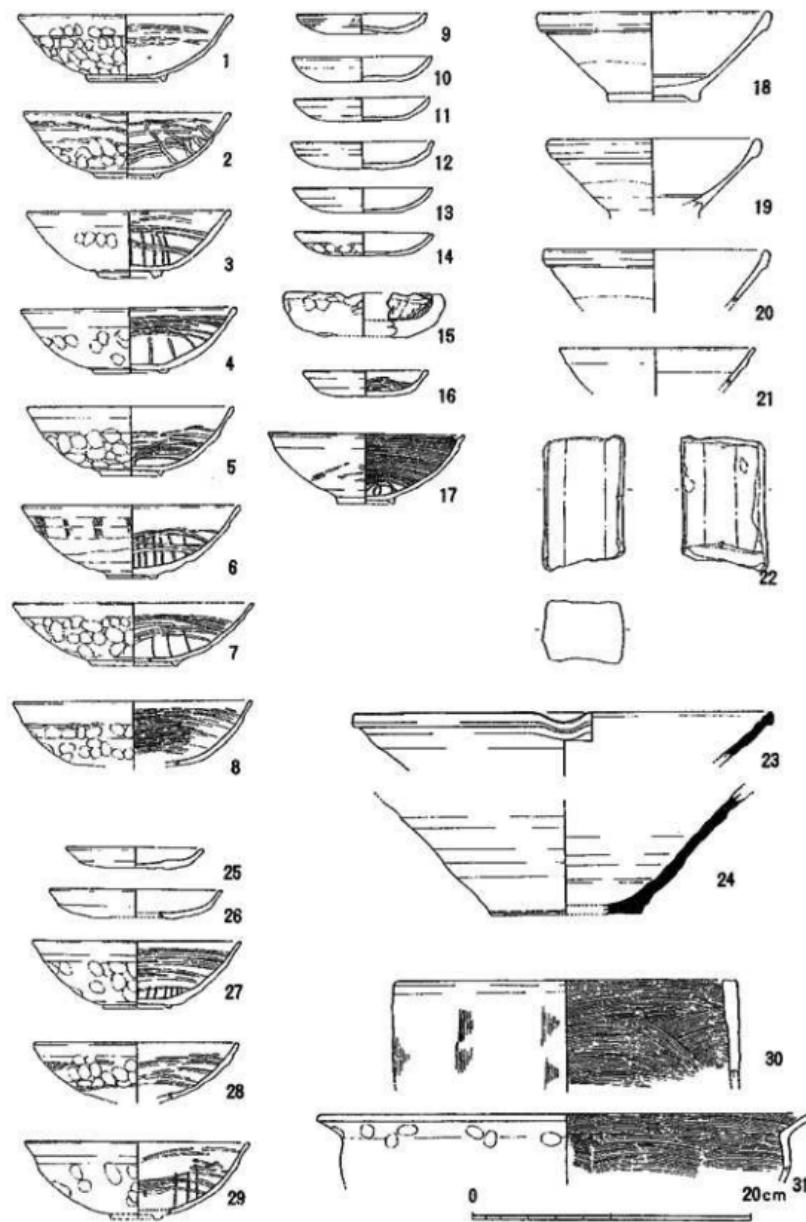
(101)は、東播系須恵器の甕である。口径21.4cmを測る。体部外面は粗い斜め方向の叩き目、内面はナデ調整を施す。

(102)は、瓦質の甕である。口径28.4cmを測り、頸部から「く」の字曲がる口縁部。全体的に摩滅、器壁の剥離が著しいため、調整等は不明。

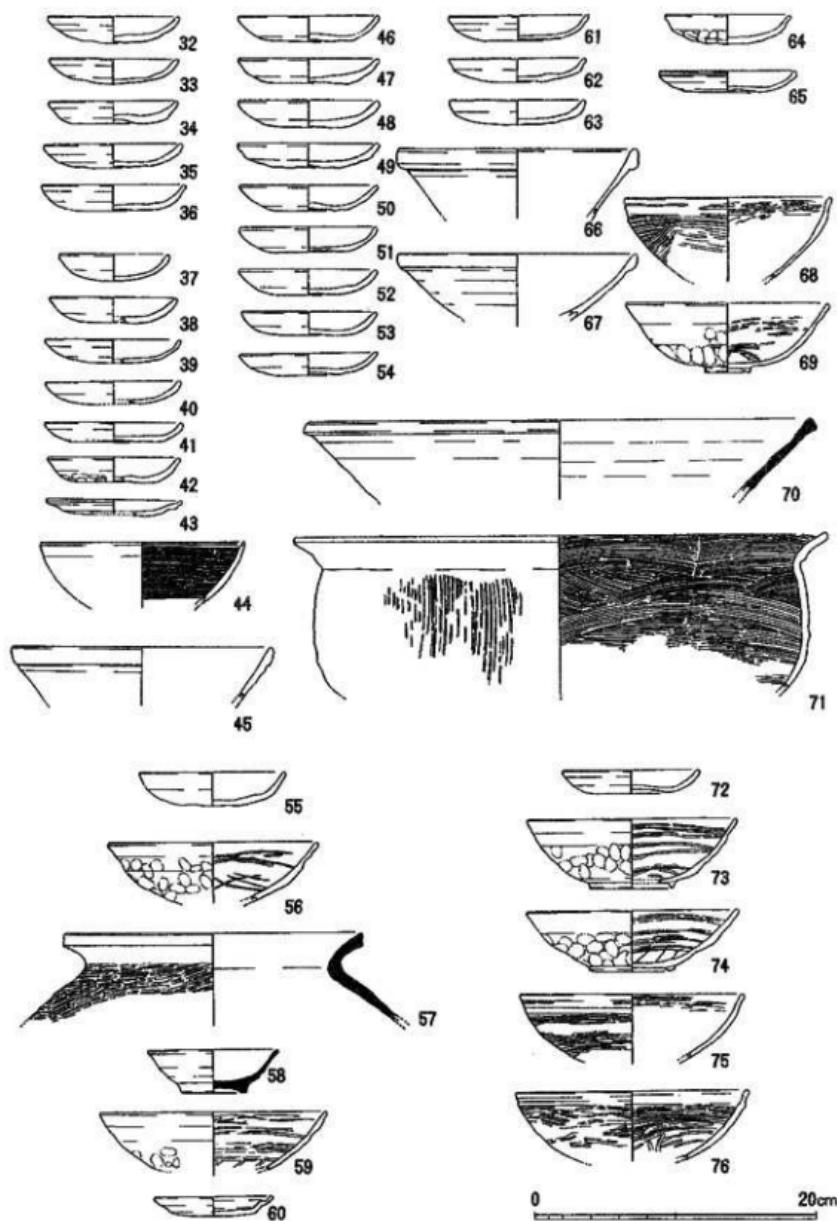
(103)は、土師器の壺である。口径27.4cmを測り、「く」の字に曲がる口縁部と外面に若干の縱方向の粗い刷毛目調整と頸部付近に指頭圧痕を残す。内面は、外面よりやや細かい刷毛目調整を全体に施す。

(104)は、土師質の羽釜である。大きく内寄する口縁部に対して、断面三角形の鈎が巡る。口径33.2cmを測り、口縁部外面から鈎にかけてヨコナデを施し、体部はナデ調整である。

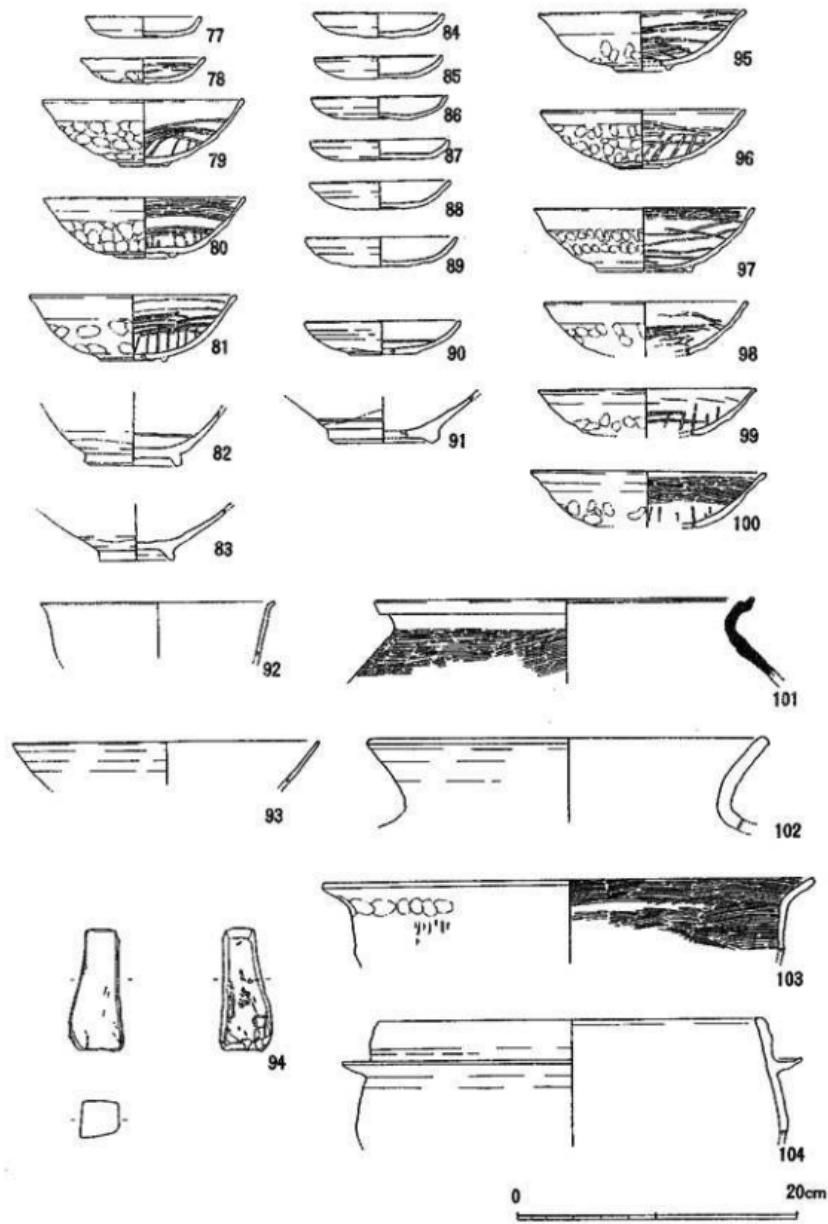
註1) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館論集4』 1978年



第5図 萬葉神社東方遺跡出土遺物 (1)



第6図 葦分神社東方遺跡出土遺物 (2)



第7図 荘分神社東方遺跡出土遺物（3）

第Ⅲ章 まとめ

葦分神社東方遺跡は、茨木市域でも南部地域に属し、今まで遺跡の実態が全く不明だった地域である。このため、周知の埋蔵文化財包蔵地以外においての不時発見に近い状況で検出されたため全面調査ができなかつたことが惜しまれる。特に今回の発掘調査は、試掘調査の結果をふまえての確認調査の色合いが強い。しかしながら、制限されたトレンチ調査であつても、多くの知見を得ることができた。今回の調査で判明した2~3の成果と問題点を以下に箇条書きにして、まとめたい。

1. 今回の調査地点では、数面にわたる遺構面と包含層を確認した。しかしながら、検出できた遺構面は2面で、第1遺構面では、近世初頭から中世の水田面そして第2遺構面では、13世紀後半を中心とする集落跡の一部を検出した。特に、第2遺構面では、明確な掘立柱建物は検出できなかつたが、柱根を残す柱穴の存在から、まちがいなく数棟の建物群を構成していたものと思われる。また、SP-01・SP-21の様な土師皿のみを埋納した地鎮遺構やSX-01・SX-03の様な地山層を削り、地形の傾斜に沿って離段上に造成した遺構そしてSD-01・SD-02のように地形的に西から東へ標高が下がっているのにかかわらず集落内を南北方向に区画する溝など中世集落の一端を示す遺構を検出することができた。
2. 幅約6m×長さ約28mの東西に設定したトレンチ調査ながら、遺跡の時期幅とある程度の範囲を把握することができた。出土した「て」の字状口縁の土師皿などの遺物から葦分神社東方遺跡は、平安時代中期（11世紀中葉頃）ぐらいに集落が成立したものと思われる。平安時代中期以前の遺物がまったく出土していないため、明確な上限は設定できないが、近隣の玉櫛遺跡の方が成立時期が若干早いと思われる。玉櫛遺跡は、平安時代中期（11世紀中葉頃）から本格的な集落を形成しており葦分神社東方遺跡も同時期に成立したものと考えたい。その後、鎌倉時代中期（13世紀後半）に発展し、光善寺の石造品から鎌倉時代末から室町時代前半には、現在の島1丁目及び2丁目付近に集落の中心が移っていたものと思われる。そして、中世後半から近世初頭には、調査地周辺は水田になっていたものと思われる。
また、遺跡の範囲としては、新和町付近におけるここ数年の試掘調査により、東は高瀬川ぐらいまで、西は、府道八尾・茨木線を越した沢良宜浜3丁目付近まで、北はJR貨物連絡線を境にしたあたりまで、南は光善寺の南側付近までを想定したい。また、遺跡の中心は、葦原小学校を中心に200mぐらいの範囲を考えたいが、詳細な遺跡の範囲は、今後の周辺地域の調査事例の増加を待って検討してみたいと思う。
3. 出土遺物では、SP-01・SP-21の様な土師皿の一括資料・SD-01・SD-02から出土した13世紀後半の和泉型瓦器塊を中心とする遺物群は、茨木市南部地域における中世集落の遺物構成を知る資料となった。特に、輸入陶磁器のうち、青磁に較べて圧倒的に白磁碗の出土量が多く、今回、数点の青磁片を除いてほとんどが白磁碗及び若干の白磁皿で占められ

ていた。そして、瓦器塊についても、従来から指摘されている様に¹⁾、13世紀前後を境にして楠葉型瓦器塊の出土範囲が枚方市楠葉東遺跡中心に半径10キロ程度となることと、一致しており、草分神社東方遺跡から出土した瓦器塊のほとんどが、和泉型瓦器塊を使用しており、楠葉型瓦器塊の出土量は少なかった。このことは、草分神社東方遺跡だけの特徴なのか、あるいは茨木市南部地域における地城的な特色なのか、中世における物資の流通を含め、今後の検討課題となった。

また、特徴的な遺物として溶解した金属滓の付着したルツボの出土である。このことは、村のなかで鍛冶生産をやっていた証拠となった。

4. 茨木市内において平安時代以降の集落遺跡の面的調査の事例は余り多くない。1991年に宿久莊遺跡⁽²⁾で9世紀後半頃の掘立柱建物が2棟と櫛列、13世紀後半の掘立柱建物が4棟と櫛列が2列検出されたのをはじめとして、つい最近まで、東奈良遺跡⁽³⁾で坪境と考えられる橋と畦畔が検出されている以外、東奈良遺跡や郡遺跡において単独に掘立柱建物や井戸や溝が検出されているのにすぎなかった。もちろん、中条小学校遺跡⁽⁴⁾において土壌から在地の黒色土器A類塊と楠葉型黒色土器B類塊との一括出土した資料などは、北摂地域における瓦器塊出現直前の土器研究に良好な資料を提供したりしたが、中世の集落構造を解明するところまでいかなかった。しかしながら、最近の発掘調査で集落構造が判明する大規模調査が茨木市内において増加しており、前述の玉櫛遺跡⁽⁵⁾や新庄遺跡⁽⁶⁾そして總持寺遺跡⁽⁷⁾において面的に中世集落が検出されている。そして、近隣の高槻市・吹田市・箕面市においても同様に中世集落の調査例が増えており、北摂地域における中世全般の総合的研究が必要な時期になってきたと思われる。

以上のように、今回の調査は、今まで全く知られていなかった茨木市の南部地域において初めて発掘調査のメスを入れることとなった。今後の調査事例の増加と北摂地域における中世集落の様相解明を考えてみたい。

註1) Musa 追手門大学博物館学芸員課程年報 第5号

橋本久和「80年代の瓦器塊研究をめぐって」

註2) 茨木市教育委員会『平成3年度発掘調査概報』

註3) 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要・II』

註4) 茨木市教育委員会『平成元年度発掘調査概報』

高槻市教育委員会『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』

橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」

註5) 大阪府教育委員会『玉櫛遺跡発掘調査概要・I』

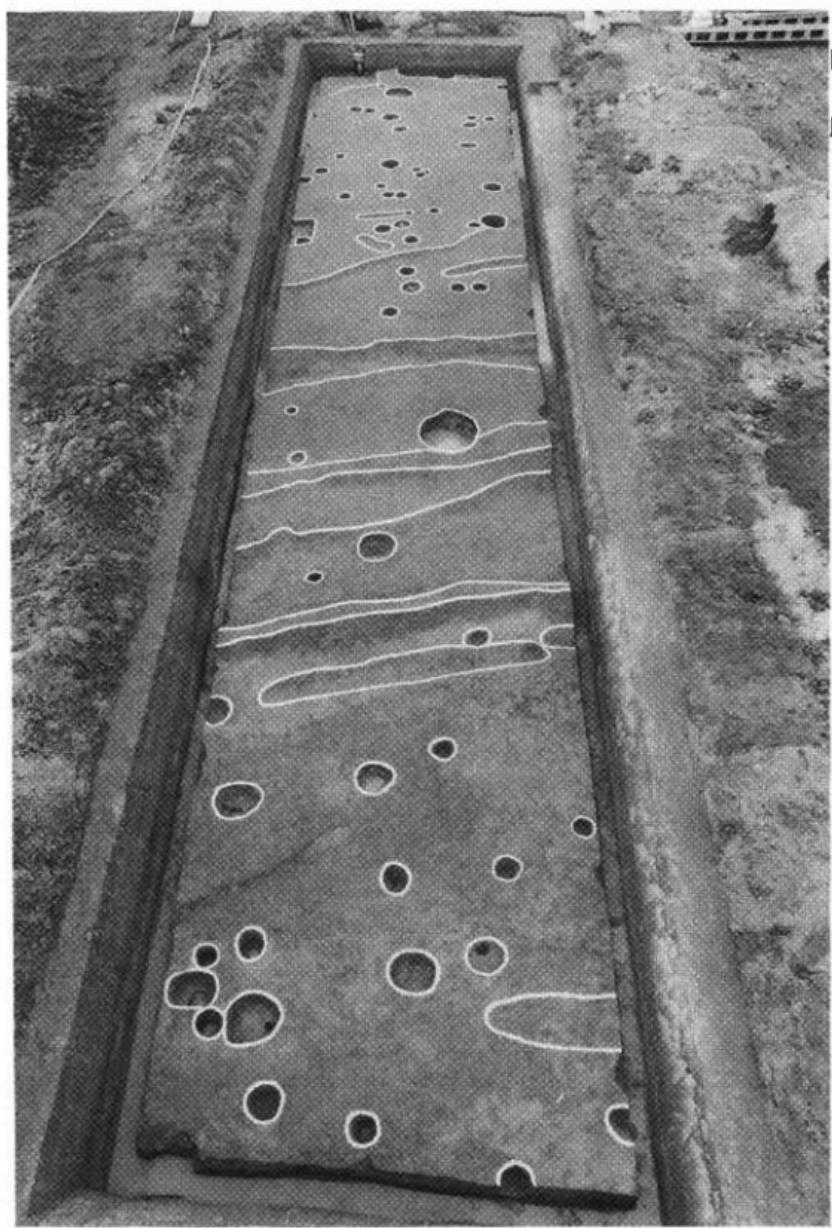
註6) 大阪府教育委員会『新庄遺跡現地説明会資料』

第30回大阪府下埋蔵文化財研究会、

松田良憲「茨木市所在新庄遺跡の発掘調査」

註7) 茨木市教育委員会が平成5年度に実施した總持寺遺跡において掘立柱建物や井戸そして青白磁の合子と一緒に埋葬した木棺墓などが検出されている。

図版

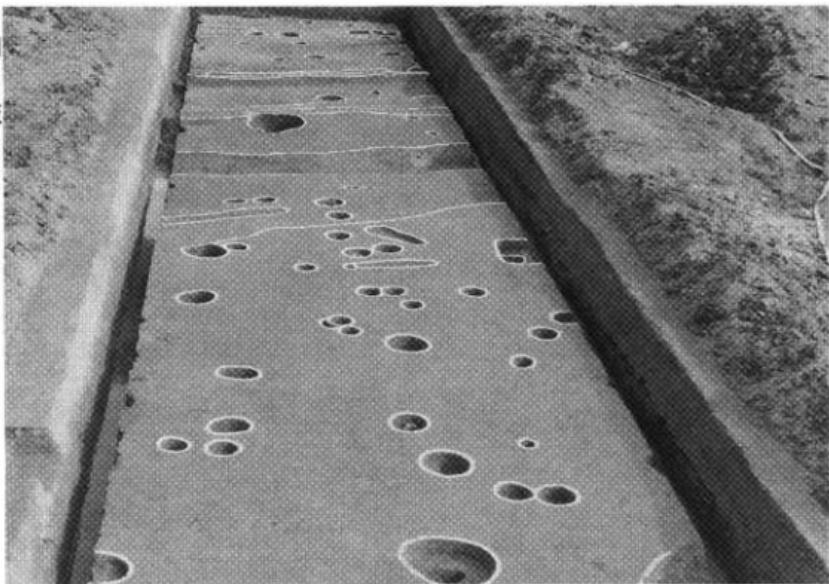


調査区全景（東から）

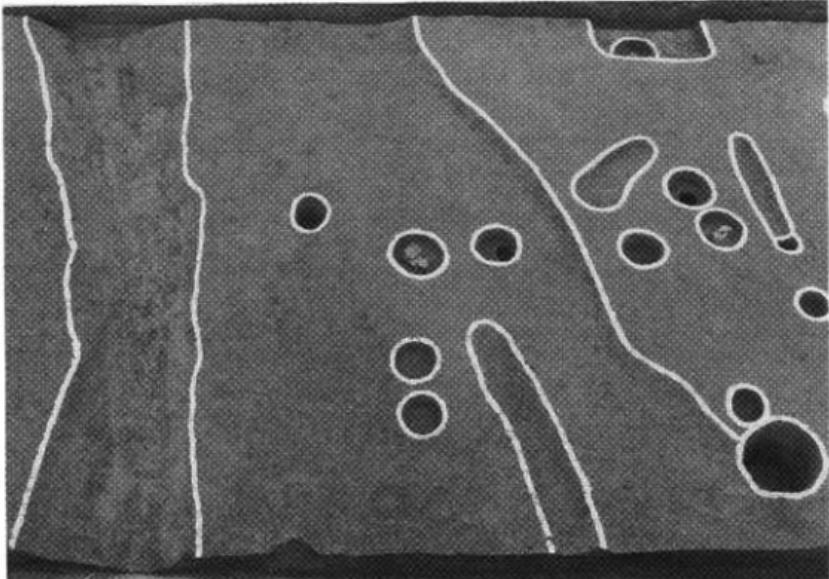
図

版

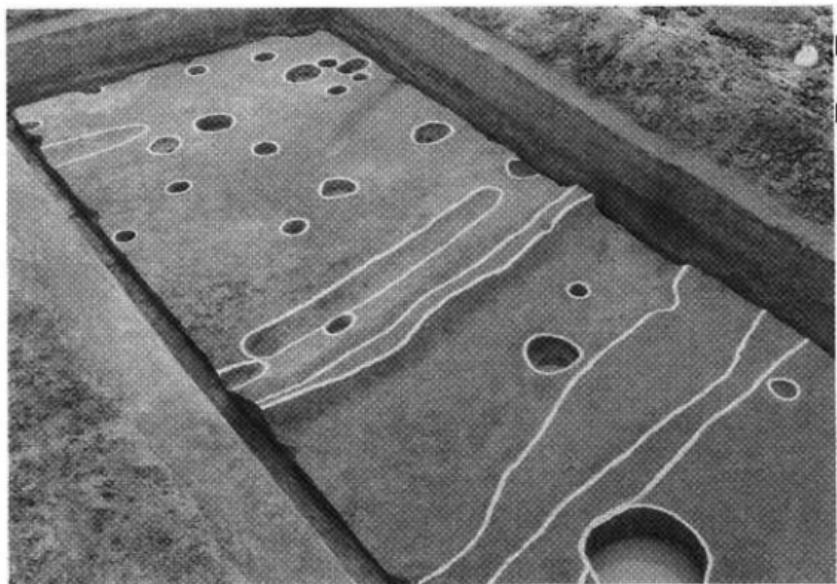
2



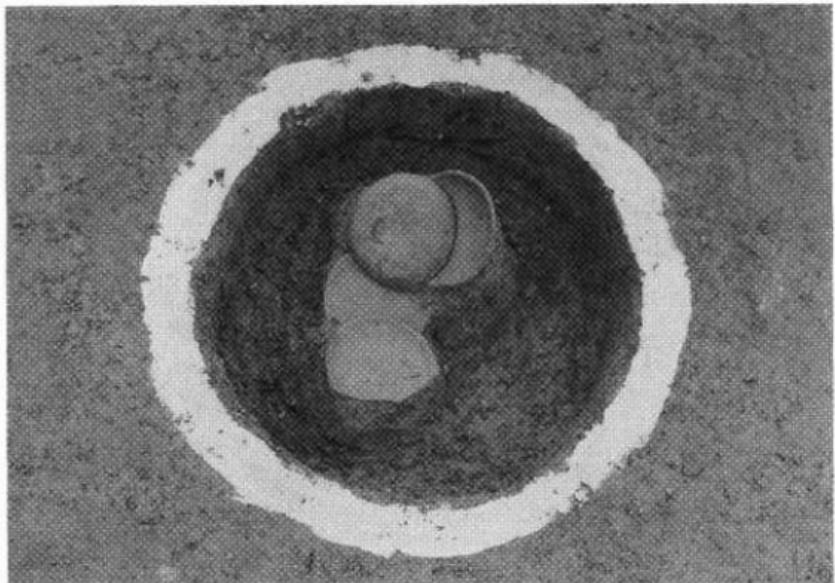
(上) 調査区全景（西から）



(下) SD-01 及び SP-21（地鎮遺構）検出状況（北から）



(上) SD-02他 検出状況（北から）



(下) SP-21（地鎮造構）土師皿出土状況（北から）

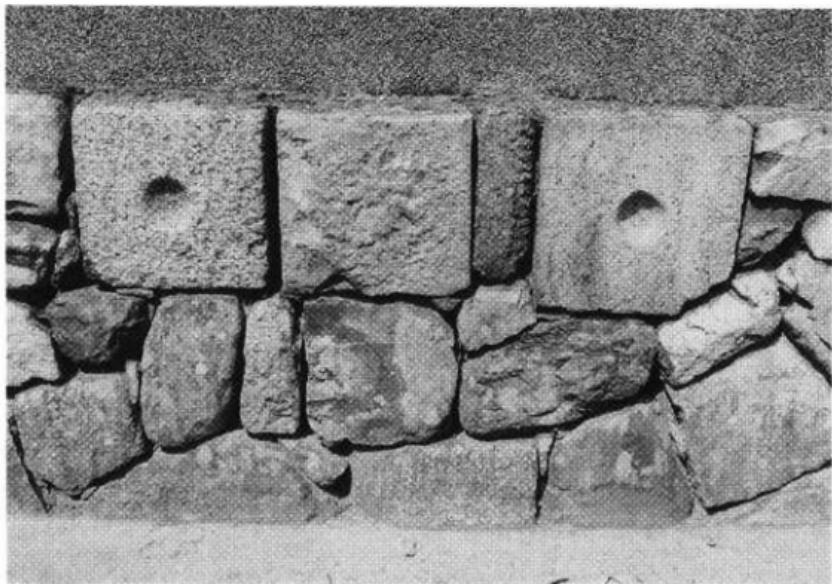
図

版

4

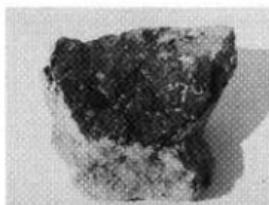


(上) 作業風景（西から）

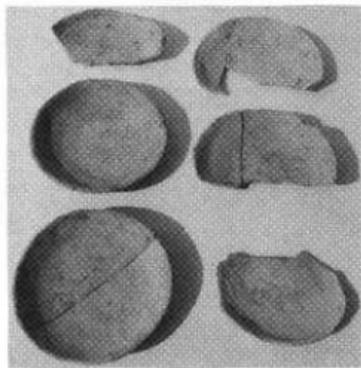


(下) 光善寺（島2丁目）石造品残欠石垣埋め込み状況（東から）

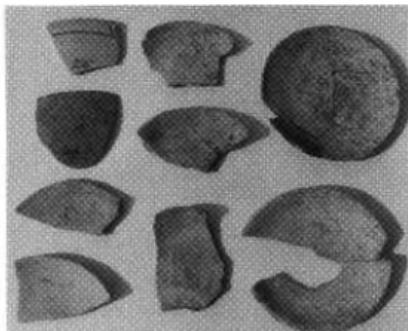
SD-01出土瓦器塊



SD-01出土ルツボ

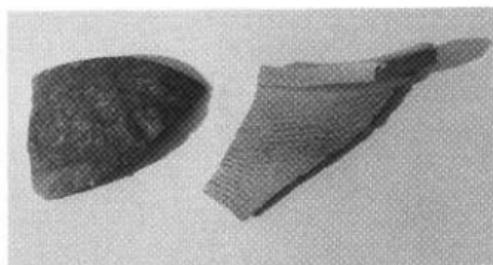
SD-01出土
(白磁碗・東
播系須恵器
捏鉢)

SP-01出土土師皿

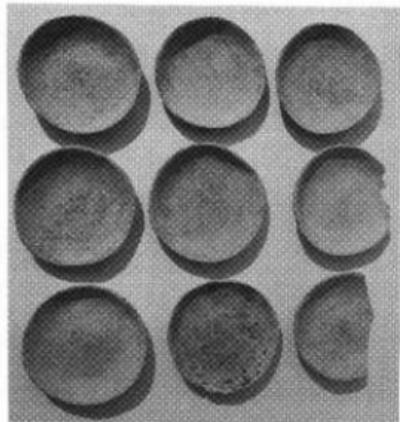


SP-04出土土器 (土師皿、白磁碗)

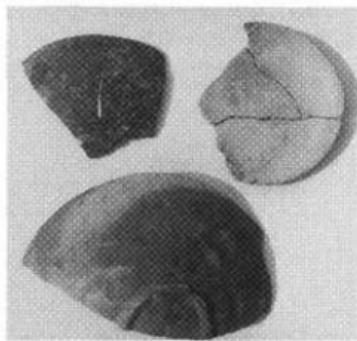
葦分神社東方遺跡出土遺物(1)



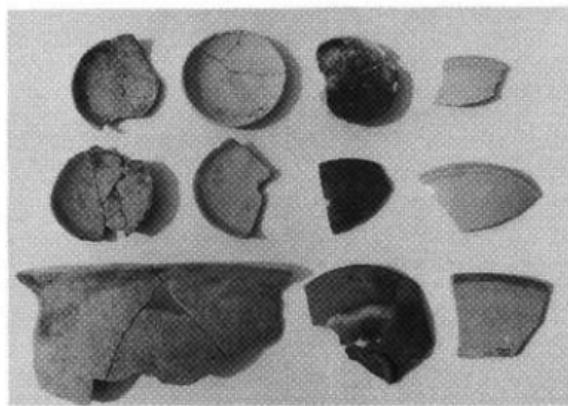
SP-06出土土器（瓦器塊・東播系須恵器壺）



SP-21出土土師皿

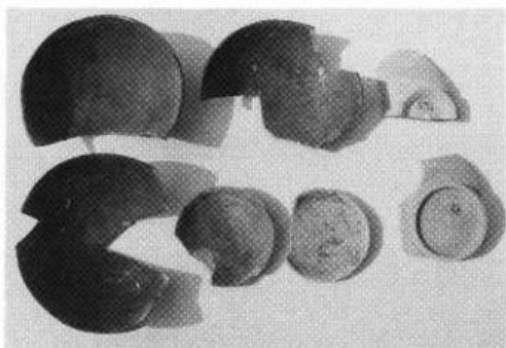


SD-03出土土器（瓦器・土師皿）

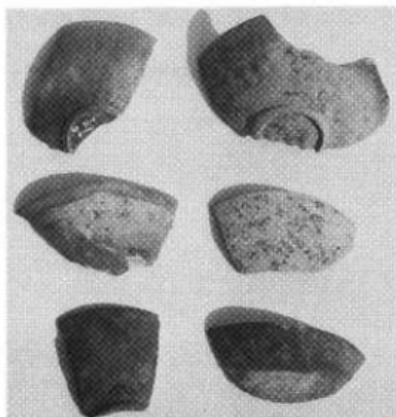


SX-01出土土器（土師皿・白磁碗・土師器鍋・東播系須恵器）

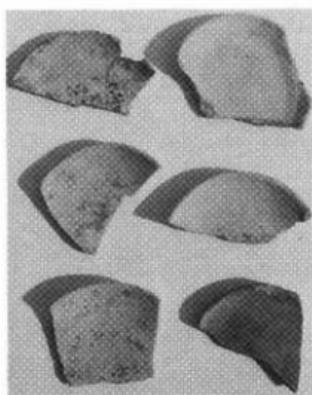
葦分神社東方遺跡出土遺物(2)



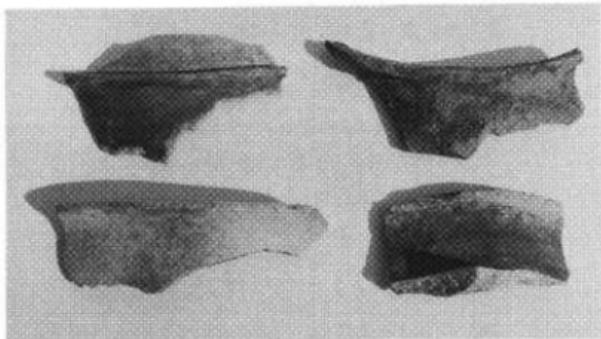
遺構面直上
出土土器
(瓦器塊、瓦器皿・土師皿
白磁碗)



包含層出土瓦器塊



包含層出土土師皿



包含層出土土器 (土師質塊、羽釜、瓦質甕、東播系須恵器甕)

葦分神社東方遺跡出土遺物(3)

葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書

－平成6年度 発掘調査概報－

発行日 平成7年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 有限会社 コトブキ印刷

茨木市下中条町3-14

TEL 0726-26-1351